



思想戦講座 第六輯

更生新支那政權の
現在及び將來

極秘

内閣情報部

一、本講座は思想戦に對する一般の認識を深めるための指導者用資料として發行するものである。

二、本稿は内閣情報部主催の下に昭和十五年二月二十三日から六日間に互つて開かれた第三回思想戦講習會講義速記録に加筆修正したものである。

昭和十五年六月二十日

更生新支那政權の現在及び將來

興亞院政務部長 鈴木貞一

只今御紹介を戴きました鈴木であります。「更生新支那政權の現在及び將來」と云ふ御話の題目を與へられたのであります。率直に私の意見を申述べますと、實はさう云ふ政權がどうなるかと云ふこと、又現在どうなつて居るか云ふことは一つの知識の部面であつて、思想戦の本當の根柢には觸れて居らぬと思ふのであります。何様、御承知のやうに日本の姿が非常な速度を以て變つて居り、大陸の事情をほつと頭の中に置いて考へて見ましても、昭和六年の滿洲事變以後日本の國家の威徳圏と云ふものが非常に擴大をして居るのであります。嘗ては陸上國境が僅かに滿鮮の國境、或ひは遼東の租借地でありました。處が今日は御承知のやうに數萬軒を數へる線に展開して居ります。即ち私をして云はしむれば、嘗ては大和島根の小國であつた所の日本が、本質的には大陸に國家圏を伸張して、大陸國家の姿を展開して居る、斯う云ふことであると思ふのであります。さう云ふ大きな大和民族の動きに依つて生じて居る所の一つの小波の如きものが支那の政權だ、と斯う云ふ風に私は感ずるのであります。而も昭和六年から今日迄十年足らずの間にさう云ふ非常な展開をして居るのであります。此の大和民族の動きが世界に千波萬波を起して居ると、斯う云ふことであると思ふのであります。

能く客觀的情勢に處して自分をどうするかと云ふやうなことを云はれるのであります。思想の原點に立つて物を

更生新支那政權の現在及び將來

考へる時には、それは一つの現象として客觀的に現れて居るのであつて、矢張り我自身の思想が動き、所謂我自身の思想が展開をして行く、之が他に矢張り非常に影響を齎す、大和民族は一體どう云ふ思想の上に、如何なる姿に於て事を進めて居るか云ふことを自己の信念とし、自己の魂として持つ所に思想戦の根柢がある、斯う思ふのであります。即ち思想戦と云ふても何も人間から分離して居らぬ。能く思想戦、經濟戦、武力戦と云ふことを聞かされ、又さう云ふものを見るのであります。是は學態に於ける一つの研究的な態度であつて、實際の生活に即して行く所のものは、是等のものの総合的進展であるのであります。戦さをするに云ふことになつて來れば、思想も經濟も武力も之を辨別することは出來ない。總てのものが混然とした一つの力となつて民族の行が進められるのであります。さうしてそれが色々の形を取つて來ると云ふことであります。

私が只今日本の動きが世界の千波萬波を呼んで居ると申したことは、極く近いことを考へて見ましても、ヨーロッパの戦争以後ヨーロッパに色々の現象が起つて居りましたが、國際聯盟と云ふもの、桎梏から脱退する、あの國際聯盟を一つの死物化するに云ふ所の尖端を切つたものは何處の國かと云ふと日本の國家であります。日本の國家が滿洲問題に對する道義的主張と、ヨーロッパの功利的な主張との争ひからして遂に此の國際聯盟から足を洗ふと云ふことに立ち到り、それに連れて急速度にイタリイもドイツも同じ歩調で歩んだのであります。即ち大和民族國家が其の道義的要請からして、此の國際聯盟と云ふ功利的な世界現狀維持の秩序機關から離れた事が、現狀打破の尖端を切つた事となるのであります。盡く左様であります。

遠く遡つて見ましても、支那に於て我々の先輩は日清の役、日露の役、或ひは其の間に於ける凡ゆる平和的の發展等幾多の發展をしましたが、滿洲事變の有様はどう云ふことになつたかと云ふことを顧みますると、明治先覺の努力の結果も逐次退歩を重ねて居る、そして遂に滿洲事變の直前に於ては尊き犠牲を以て得た所のものをも捨てなければならぬと云ふやうな氣持に迄民族思想が弱化して來たのであります。其の現象は何であるかと云ふとワシントン會議であり、ロンドン條約であります。斯う云ふやうなことであります。

是は何を意味するのであるか。それは勿論他の國の政策、意圖等も關係致しますが、併しながら自らの思想が確立せざるが故に、さう云ふ事態に立ち到つたのであります。だからして思想戦に於ける所の根柢は知識の追求ではなく寧ろ人々々が持つて居る所の魂、『一寸の蟲にも五分の魂』と昔から云つて居るやうに、況や人間である、生れ落ちた時から、而も其の思想は親或ひは爺、更に遡れば非常に遠い年代を経て我々に來つて居るのであります。即ち茲に私をして云はしむれば原靈なるものが存在をして居る。其の原靈なるものが我々御互ひの身體の中に宿つて居る。其の原靈を把握して、其の原靈を活かすと云ふことが思想戦の根柢であると私は思ふのであります。

さう云ふ意味で始め申上げましたやうに、政權の問題と云ふやうなものは單に知識の問題であつて、本當の魂を磨く爲に全然役に立たぬことではないが、非常に微弱だと云ふことを考へつゝ御話を致すのであります。

今日の新興支那が、如何にして出來て居るか。漢民族自體の生命に依つて此の新興支那が出來て居るのであるかどうかと云ふことを、我々は又更に考へて見る必要があると思ふのであります。是は全く大和民族の行によるのであつて、其の行たるや非常な犠牲を拂つての行であります。御承知の如く十萬の聖靈を失ひ、幾多の國帑を費した結果であります。此の事はよく／＼腹に收めねばならぬ事であります。國內に於ては便々として意志薄弱なる思想の確立せざ

更生新支那政權の現在及び將來

る人々が多くて、此の頃物が足らなくなつたらどうするかと云ふやうな悲鳴を聞くのでありますが、大和民族の行、此の行の力が即ち新興支那を生んで居るのであります。漢民族の如何なる部面からの新興でも何でもないのであります。そこで此の現在の支那の政權は、斯かるが故に盡く大和民族に根柢を置いて、大和民族の行の上に立つて居る政權であります。でありますからして、現在の政權が良いか悪いかと云ふやうな問題、此の力が強いが強くないかと云ふことは、一に大和民族の矢張り行の強弱に依るものであると私は思ふのであります。

色々支那に旅行された方々が歸つて來られて、さうして此の政權の問題について話をされるが、そこには色々の現象が現れて居る。併しそれは矢張り漢民族の動きもさることながら、矢張り根柢は大和民族の動きであります。大和民族の動きが其の鑑となつて現れて居る姿が、それであると斯う私は見るのであります。

そこで、現在の政權は既に御案内と存じますが、蒙古に蒙古自治政府と云ふものがあります。此の蒙古自治政府と云ふのは皇軍の蒙疆地帯への進撃に伴うて、山西の北部即ち晋北の地區に一つの治安維持會と云ふものが出來まして、之が發達を致しまして晋北に自治的の政府が出來、それから蒙古の方に此の事變前から自治的運動があつたものが組織されて蒙古に自治政府と云ふものが出來ました。それから察南地區に同様な政府が出來て、此の三つの自治的政府の組織が段々發達して、爾後蒙古聯合自治政府と云ふものが出來たのであります。之が昨年の十一月に至りまして合體して現在の自治政府と云ふ形を取つて居るのであります。其の地域は山西の詰り大同附近、山西の北部地區長城から以北の山西省、察南、蒙古と此の三つの地域で、西の限界は限定して居りません。此の政府が出來て居るのであります。此の政府の性格と云ふものは何であるかと云へば、要するに對露國防の空陸地域としての價値を遺憾なく

發揮さすと云ふことを意圖しての政府の組織であり、活動であるのであります。

抑も此の事變の起つた原因を探究致して行きますと、滿洲事變と一聯の關聯性を有つて一つの武力闘争と云ふやうな形が展開して來るのには、そこに兩者の間に相容れざる所の政策の方向が採られて居るのであります。それが遂に激發して武力戦になるのであります。支那側から云へば——支那側と云ふよりも寧ろ此の支那と云ふものの性格、漢民族の社會の性格、さう云ふものから來て居る所の一つの動き、其の動きは滿洲事變以後北に限定して云ふならばソヴィエト・ロシアの非常な對策轉換からして長江流域に巢をくつて居つた所の共產軍が西北に移動し、所謂ロシアのコミンテルンのファツシヨ排撃、人民戦線と云ふ政策を採つたのであります。嘗てはアングロサクソンを目標として居つた所のコミンテルンの在支活動が滿洲事變後人民戦線運動の形に於て日本に目標を向けると云ふことから、從來アングロサクソンの最も重大な權益地帯たる長江流域を脅威する態勢にあつた所のコミンテルン勢力と云ふものを、直接に外蒙古と關聯を有する方面に誘導して、さうして日本の滿洲國經營と關聯性を持つ所の北支政策を抑壓する、之を妨害すると云ふ方向を取つて來たのであります。之に對して滿洲國建國に一體不可分の努力をして居る所の日本は、どうしても此の滿洲國との關聯性からして、北支・蒙疆の政策を展開せざるを得ない、さう云ふことからして今次の事變と云ふものは起つて居るのであります。

従つて蒙疆地帯に於ける所の性格と云ふものは、只今申上げましたやうに對ソヴィエト國防、對コミンテルン活動の防壁と云ふやうな意味に於て、此の政府が活動すると云ふことは當然の歸結であるのであります。さう云ふやうな性格を有つて居ります關係で、此の内部の組織も此の國防態勢が短時間に出來ることを必要とするのであります。

す。漢民族と云ふものは御承知の如く非常に仕事の上に時間觀念がない、斯う云ふものを相手にして東亞の防衛と云ふものを御機嫌を取りながらやつて居つたのでは仲々むづかしい。そこで少くも此の國防の第一線地域を完成する所の地帯は、活潑に此の國防に所要の施設をしなければならぬ、従つて是は殆ど日本人が此の中の役員となつて、此の性格に基づいた政府の仕事をして居るといふ實態であります。

私茲で申上げて置きますが、能く日支の協力と云ふことを仰つしやる、日支の協力をしなければならぬことは確かな事實であります。漢民族が如何なるものであつても是は現存して居るものであるからして、此の現存して居る所のものと手を携へて、さうして日本の意圖する所を遂行して行くと云ふことはやらなければならぬ。併しながらそれは必らずしも漢民族の云ふ通り物をやつて行く、漢民族の云ふことを十が十迄聞いてやつて行くと云ふ意味ではない。矢張り何としても現代の世界の情勢から見て、日本の國家が將來直面すべき所の各般の事態を考へて問題を處理して行く必要があるのであります。

さう云ふ觀點に立つて北支・蒙疆と云ふやうな地域を眺めます時には、又南に於ては海南島、其の他の海洋作戦基地を眺める時には、是等の絶對的のものは、よしんば漢民族が如何に嫌がつても、大和民族自體の力に依つても實行して行かなくてはならない。滿洲國につきましてさう云ふ部分を簡單に申上げますと、滿洲國經營の目標は何であるかと云ふと、所詮は日本の國防の安泰であり、東亞の防衛であります。東亞の防衛をして行くと云ふことになつて生れた滿洲國、此の滿洲國の國境地帯と云ふものをちよつと眺めて見ましても、此の國境地帯を漢民族の意思を過度に尊重し、その御機嫌を取りながらものをやつて行くと云ふことになつて來ると、ソ聯の領域に於ける所の單なる軍事施設

の一部面を見ても、之に即應することは出來ないのであります。茲に於て形は滿洲國の形を取りながらも、國境地帯に於ける所の役員は殆ど日本人を以てしなければならない、それと同じやうな現象が蒙古地帯に於ても起つて居るのであります。

それから第二は北支であります。是は事變の起つた十二年の十二月、其の前に事變と同時に治安維持委員會が出來、之を誘導統合を致しまして十二年の暮になつて中華民國臨時政府と云ふものが出來たのであります。でそれ等の組織については書類がありますからそれについて御覽を願ひたいと思ひますが、之亦先程の事變の出發の過程から云つて、北支の政府と云ふものは多分に此の防共國防的な意義を含んでの政府であります。で今後支那の新らしい政權が出來ると云ふても、蒙疆を特別地帯にする、又北支も特別な地帯にすると云ふことは、一に事變の根柢から自然的に生れて來て居る問題であります。即ち北支政策と云ふものはどう云ふ形を取つて展開をして來たかと云ふことを一應回顧して見ますと、滿洲事變は昭和八年の二月から三月に掛けました熱河の肅正を以て一段落を告げました。當時熱河は張學良が蟠踞して居りました。之を掃蕩して、皇軍は通州密山の線に出たのであります。詰り京津の地方を指呼の間に睨んで一舉に此の京津を占據し得る状態になつたのであります。其の當時京津の地には所謂蔣介石の部下何應欽の率ゆる中央軍二十數萬が蟠踞して居つたのであります。之が日本軍と一戦をすると云ふ形になつて居つたのであります。處が滿洲事變の際の日本の宣言、其の他滿洲事變の間に於ける日本の世界に對する外交の方向、國際聯盟に於ける所の外交の闘争の經過、其の他諸般の關係を考へられまして、一氣に支那本土に武力侵入をすると云ふことは御許しをいただけないのであります。

そこで御承知の如く停戦を致しました。さうして北支には當時微温的な親日政權、微温的であるが滿洲經營と云ふものと、此の滿洲經營から来る所の漢民族の感情の激發、常に漢民族の失地回復と云ふことを腦裡に有つて居る所の軍閥、此の漢民族軍閥の中間に之を緩和すべき所の一つの微温的の政權を置いて、さうして徐々に日本の必要とする所の滿洲經營をする、又其處から起つて来る所のソ聯の動き、其のソ聯の動きに對應する北支經營と云ふものを進めて参つたのであります。それが段々進展致しまして、北支の政務委員會となつたのであります。當時最初の指揮は何と云つても此の日本の國民性なり、日本の國策の動きなりに理解を有つ人間を北支に据ゑなくちやならぬと云ふことと北支の軍人は何應欽、政務の方は黃郛でありました。此の黃郛は嘗てワシントン會議に臨んで、日支の兩全權が恰もアメリカ人の前で裁判を受けると云ふやうな格好を取るので、是は堪へられないと云ふことで、自ら席を蹴つて、ヨーロッパに逃れた人で、日本と云ふものをかなりの程度に理解をして居つた人であります。詰り今後日支提携をして、さうして白人に當らなくてはいかぬと云ふ考をワシントン會議に於て強く抱きまして、名前迄磨白と變へた位の人であります。此の人が詰り蔣介石の側に居つて、さうして蔣介石と云ふものをイギリスが掴まうとする、ソヴィエトが掴まうするといふやうな色々の現象を側に居て見て居つて、日本との關係を調節して居つた人であります。其の子分に嘗て上海で此の事變前に殺された唐有壬、斯う云ふ人も居るのであります。現在蔣介石の側に居る張群の如きも此の黃郛の弟子であります。

其の前に若干大きな動きを申します。支那の政權の動きと政治の動きと云ふものは清朝の千八百五十三年に起つたのであります。是はどう云ふ時期であるかと申しますと、詰り千八百四十年に阿片戦争で叩かれて、清朝の所謂弱點を暴露しました。清朝と云ふものは一體どう云ふ風であつたかと云ふと、御承知の如く明の衰弱に乗じて愛親覺羅が起つて二十年許りで以て一應支那を平定した形になつて居るのであります。實際は平定をして居らない、到る所に矢張り今日發生するやうな匪賊が澤山居りました。其の匪賊の關係とそれから所謂根柢であつた所の滿洲八旗の衰弱、即ち職を離れて自ら北京に蟠踞して居りました。さうして訓練も何もせず所謂支那を取つたやうな氣持になつて行が伴はない。その結果滿洲八旗と云ふものは墮落をする。従つて之に附隨して居つた蒙古八旗も墮落をする。さうすると漢人種が段々頭を上げて来る。さうして阿片戦争の頃となつては、殆ど土崩瓦壞のやうな形勢を呈して居りました。そこに列國の壓力が加はつたので、遂に阿片戦争と云ふものは大失敗をしました。此の失敗に依つて清朝の實力が瓦解をし、其の間に乘じて漢民族の擡頭、それが二つの形を取つて現れました。一つは詰り清朝の恩顧を感じた所のものであります。それは千八百五十三年頃の曾國藩を中心とする新興勢力者の努力、他は一氣に之を覆へさうとする太平天國の亂、斯う云ふものが現れました。太平天國の亂の流れを酌んだものが、即ち孫文であります。孫文の革命、所謂興中會といふものの火の手を揚げたのは、太平天國の亂の後四十年も経つてからであります。そこで清朝と云ふものを中心にして動いて来たものには曾國藩、李鴻章、斯う云ふやうなものが居るのであります。さう云ふものがずつと流れを酌んで尾を引いて来て袁世凱の所へ来る。袁世凱の時代になつて所謂革命が成功をする。それは此の袁世凱時代になつて来ると、清朝の周圍には多く滿洲出の人間を使つて居つたのであります。之が段々革命思想に浸透して、さうして所謂孫文の革命思想と云ふものが清朝の周圍にも浸透して来る。當時の實際の實力は袁世凱に歸し北方軍閥の段祺瑞、張作霖と云ふやうな軍閥が夫れに付いて居つたのであります。李鴻章が第一に日本

を目標として軍隊を建設したのであります。其の下には張之洞であるとか、袁世凱であるとか、盛宣懷とか、政治家としては唐紹儀、伍廷芳、斯う云ふやうなものが居つたのであります。併し此の中で唐紹儀、伍廷芳と云ふやうなものは段々革命の思想を受けて革命勢力に合流し、而して所謂北洋軍閥と云ふものは詰り袁世凱の一手に率ゐられたのであります。だから外形的の實力は當時孫文の武昌に於ける所の旗揚げを一氣に潰し得る勢力があつたのであります。袁世凱自らが皇帝を夢見て革命を潰さず、到頭孫文と一緒になつたのであります。之が詰り千九百十二年でありまして、是から現在の支那が生れ出たのであります。

併しながらさう云ふ現在の支那が生れましても、地域の大なる文化の複雑なる結果直ちに古きものは解消しない。支那のことであるから領土が非常に大きい、ドイツ或ひはイタリー又はフランスの如く領土の小さい國家でありますれば、南の一群が直ちに北を亡ぼして三箇月でも四箇月でも政權を奪取することが出来るのであります。併しながら領土が廣い支那にあつては、此の革命の進展と云ふものが非常に徐々に移行をして來ます。是は風土の特質であると思ふのであります。さう云ふものがずつと此の流れを引いて來たのであります。さうして其の間列國が其の後に蟻踞して居つて之を操つて居たのであります。例へば曾國藩が軍隊を作ると云ふやうな時には、阿片戦争以來を引いて居る所のイギリスの力が付いて居たし、李鴻章の時代にもイギリスが力を引いて居りました。袁世凱の時代になつて來れば、完全にイギリスの懷の中に入つて來た。さう云ふ時に革命勢力はどうなつたかと云ふと、孫文及び彼と一緒になつた所の黃興と云ふやうな革命の先達は、絶對的に當時は日本に付いて居つたのであります。で孫文の作つた所の色々の革命謀略の如きは、日本に於て當時所謂志士と言はれる者の指導を受けてやつて居るのであります。處

が其の後進展して北洋軍閥が袁世凱を経て段祺瑞の手に入り、さうして段祺瑞が日本の寺内内閣の政策に依つて援助を受けるといふことになつて來ると、昨日迄日本と一緒にやつて居つた所の孫文であるとか、岑春煊であるとか、唐紹儀、梁啓超、是等の者の所謂革命勢力は反轉して所謂英米に結び付く、斯う云ふことであります。さう云ふやうな經過を踏んで居るのであります。

只今申上げた黃鄂は此の革命の時に日本の陸地測量部に居つたのであります。彼は測量部を卒業した人でありまして、革命の先達の下に南京攻略の時の幕僚、其の時日本の陸軍士官學校に居つた所の二人の青年、即ち蔣介石と張群、此の二人の青年が黃鄂の下に走せ參じて、さうして所謂青年の血を燃やして革命を實行したのであります。其の後袁世凱に叩かれて、革命派は遂々の態で各國に亡命すると云ふやうなことになつたのであります。さう云ふ關係から又郷土を同じうして居ると云ふやうなことで、黃鄂の指導を受けて成人した蔣介石が革命を形式上一應成立させたのである。即ち昭和三年に一應支那本土の革命を終つたのであります。其の革命が終つて、當時イギリス大使ランプトンに掴まれてイギリスの懷に入つた時にも、尙日本との關係を保持しようと努力して居つた人間であります。其の人間を北支に引張つて來て、さうして北支に政務委員會と云ふものを執行させる。さうして茲に先程申しました日本の滿洲經營と關係性を持つた所の北支政策の實行と云ふことに移つて來たのであります。

處が現在のやうな姿に展開をして來ました。従つて北支の對北支政策と云ふものは、依然として日本の大陸經綸の重要な問題として之を取上げられると云ふことは當然であります。其の日本の考からして、北支の臨時政府と云ふものが動かされると云ふことも當然であります。

では私の疑のない點であるからして不遠慮に申上げるのでありますが、能く外國人はロボット政權とかバベツト政權とか申すのであります。ロボット政權でも何でも是は云ふものが云ふだけであつて、それちやロボット政權であるから、支那人が自由勝手にやるものにやらすと云ふことになつたら、それは出来ません。私の研究した處の信念から行くと、東亞の防衛と云ふものは、唯大和民族に依つてのみ可能である。今日の事態は之を大きく根柢的に考へて來ると明治維新の大陸的顯現であると、斯う私は見て居るのであります。詰り明治維新は明治大帝の億兆安撫の爲に御降しになつた御眞翰の中にあるが如く、萬國と對等になり、列國と對等になつて日本の國威を輝かせ、斯う仰つて居られるのであります。是は嘉永六年と記憶して居りますが、御承知の如く浦賀にアメリカがやつて來、次で鹿兒島・下關に英國、函館にロシアの力が加はつて來たのであります。是は道光年間支那が土崩互壞するに及んで、漢民族を屠つて列國の力が日本の大和島根に押し寄せて來て、之が日本の傳統的力に依つて反撥し、さうして明治の維新と云ふものが展開して居るのであります。それがまた引續いて日清戦争とか日露戦争とか、或ひは其の間に於ける平和的な進展となつて居るのであります。

處が大正の中頃から國內に於ける色々の事情からして、大和民族自身が此の發展力を弱化して來ました。此の間に乘ずる列國の壓力は折角先輩が築いた所のものを自ら逐次抛棄する様な形となつたのであります。顧みますと明治の末年に於ては陸軍の關與する部面だけを見ましても、軍隊の整頓・徵兵の目的は果されて居つたのであります。滿洲事變の直前に於ては皆等閑に附されてゐました。而して其の原因は何處にあるか、根本は國民が御示しを切々と身に行はぬ事でありませう。國內に於ては民力休養など申す言葉が現はれたのであります。でありますから現在東亞の

防衛の爲に戦ふのであります。明治維新當時の先學者は日本の島を城として戦へ、此の城に據つて討死するんだと云つて、明治維新が展開されて居るのであります。處が其の氣魄といふものが、我が民族から追々薄くなつて來ました。それが窮まりまして、遂に滿洲事變となつて爆發致して來て居るのであります。

でありますから今日支那大陸に於てやつて居る仕事は此の東亞の防衛、殊に今日の如く軍事科學が進んで、アメリカとの間の海上も何干涇と云つての、んきな顔をして居られない處の東亞の防衛であるのであります。正に明治御維新を大陸に於て實行して居ると云ふことに、思想的にも現象的にもなるのであります。詰り海上について領海といふことを言ふけれども、日本の領海と云ふのは一體何處だ、領海と云ふものは一體如何なることに原因して領海と云ふものの國際條約が出来たのか、さう云ふものについて突詰めて大和民族國家の完成の上から、自ら其の領海に對するものを考へなければならぬ。さう云ふ事態に迄なつて居ると思ふのであります。

これは餘談であります。私が先程申上げたやうな人を立てて、さうして徐々に進まうと云ふ時、偶々斯う云ふ風になつて來たので、北支に出來た處の政權も亦蒙疆と等しく日本の考が非常に強く反影し、日本の色彩が強く、殊に搦て、加へて北支は單に蒙疆の友邦的の意義が深い以外に、日本の國防上必要とする所の資源を確保しなければならぬと云ふやうなこともあり、又從來北支の人口の有つて居る所の經濟的な要求と云ふものがあり、是等のものを満足させつゝ、日本の必要とするものを建設して行く、茲に北支政權なるものが出來たのであります。一體南と北と云ふものは非常に風土が違ふ。で南の孫文の思想必らずしも北に受け入れられない。北の王道思想必らずしも南方に受け入れられない。斯う云ふやうな風土から來る所の思想上の差違があり、日本の要求も只今申しましたやうに

非常に強いものがあると云ふことから北支にあつては、御承知の如く維新政府がございます。此の維新政府は稍、趣を異にして居る。と云ふのは揚子江の流域と云ふものは、若しこの揚子江の流域に於て日本が北支若しくは蒙疆で行つて居ると同じやうな性格をそこに賦與して、さうして之を如實に實行して行くと云ふことであるならばやつて出来なことは無いが、非常な摩擦が起る。と云ふのは一體此の揚子江と云ふものは如何にして今日あるかと云ふことを考へて見ますと、何と云つても揚子江を開いて其の入口に上海と云ふやうなものを建設して今日あらしめたのは千八百四十年の阿片戦争がきっかけでありまして、其の後に於ける列國の努力と云ふものは約百年に亘つて繼續して居るのであります。而もそれが下に

伸びて御承知の如く香港があります。此の事變を成るべく列國との摩擦を少くして、而も日本の今後直面する所の事態に應ずるやうに處理すると云ふ考から行きますと、端的に日本の性格を強く十分に之に打込んで行くと云ふことは困難な問題であると思ふのであります。そこで此の政權の問題にしても、書類を見て御理解を戴く爲には、現在東亞の新秩序を樹てると云ふ御言葉を戴いて居るのであります。是は矢張り我々の年がら年中やつて行く所のものを考へる目標を戴いて居るのであります。茲に到達する現象、新しい秩序と云ふことは結局何であるかと云へば古いものではない、古いものは千八百四十年の阿片戦争をきっかけとして、列國の支那侵略、その近代的な繼續的動きとしてのソヴィエトの動き、即ちアングロサクソンの持った所の資本主義の精神に立脚して、支那の市場の獲得、支那の資源の開発、或ひは交通の把握と云ふやうな所謂此の經濟的な侵略と云ふものが行はれて居つて、其の思想の發展、

した形に於てのコミンテルンの侵入であります。是が支那現在の事態であります。此の國際的に非常に混濁された所の支那を洗つて、さうして日本と眞に提携をして、日支の提携を基礎としての列國との協力、斯う云ふ形に建設仕直すと云ふことであります。是は非常に長年月を要する事業であると私は思ふのであります。

そこで此の長年月を要する間に起つて来る所の障碍と云ふものを、どうしても突破し克服して行かなければならぬ。國內的にも障碍があり、對外的にも非常な障碍が現在目の前に横つて居ります。それであるから仕事を進めることはさう云ふ理想を追求しつゝ現實の事態をはつきり握つて行かなければならぬのであります。斯う云ふことからして見ると、蒙疆であるとか、或ひは北支であるとか、乃至海南島であるとか云ふやうな問題とは稍、趣を異にして、此の問題と云ふものは處理されなければならないと、斯う思ふのであります。

併しながらそれでは今の維新政府がどうかと云ふことになつて来ると、如何様今の維新政府と云ふものは御承知の如く非常に戦亂の激しい間から生れて居るのであります。而も是は北に於ても何處に於ても支那の全體の動きがさうであります。支那人は今日日本が勝手なことをやつて居る、非常に困る、と言つて居るのであります。昨日もアメリカ人がやつて来て

「日本は勝手なことをやるぢやないか」と云ふから

「勝手なことを一つもやらぬ」

と申して置きましたが、勝手なことではない、是は物の伸展の動きと反動との動きであります。

更生新支那政權の現在及び將來

一體此の事變と云ふものがどう云ふ所から起つて来たかと云ふと、現象的には排日、容共、抗日、反日、斯う云ふものが過去に於て累積して遂に激發して茲に來て居るのであります。然らば其の結果と云ふものは何處へ行くかと云ふと、人間の感情と云ふものは反動的に留まる所以上に進むと云ふことは當然であります。であるからして現在に於て戦争の事態が繼續して居ると云ふことを認めよと云ふことは、そこに根柢して居ると思ふのであります。詰り戦争と云ふものは、反動的に勝つたものは非常な力を以て他の敗戦國に向つて色々の行動が行はれるといふことは當然であります。それをしもやらぬといふことならば、戦争の事態を認めないことでもあります。併しながら是が冷静に還り、眞に日支提携をするといふ部面から物を考へて來る時になれば、是は調整をさるべき問題であります。調整をされるといふ問題は、揚子江に於ける所の地帯は、揚子江の歴史的な發展から來る所の揚子江地帯、あれだけの長さ、數百里に互る長さの航行地域、其の地域に生存をして居る所の人口が二億もあり、其の二億の人口の生産消費生存と云ふことからして之をどう始末するかと云ふことは、自然に考へられ調整されて行く問題であります。現在の維新政府は御承知の如く昭和十三年の正月に出來たのであります。それは上海の戦さの直後、兎に角治安を保つと云ふ爲に漢民族を協力させようと云ふ意圖からして出發したものであります。従つて陸海軍の作戰用兵と云ふものと密接な關係を有つて立つて居るのであります。此の色彩が非常に強いと云ふことも已むを得ざることでもあります。

そこでさう云ふ政權を保護して將來支那をどうして行くかと云ふことは、昭和十三年の末になつて御決めを戴いた所の一つの方向があります。それは正に此の支那事變と云ふものを生んだ原因の世界史的な意義、又現在の事變に於ける所の世界的な意義、日本を中心とする東亞の防衛等色々の問題を考へて、さうして斯う云ふ所に落付けなければ

らぬといふ一つの方向を御定を戴いたのであります。是が詰り新政權の運動となつて現れて來て居るのであります。次に其の運動の方向は何であるかと云ふことを述べたいと思ひます。先程もちよつと申上げました通り此の新らしい秩序を建設すると云ふことは非常に長い年月を要するのであります。此の間に於ける所の國際的な動きと云ふものを能く把握して、先づ以て日本の國家の國防力、従つて東亞の防衛と云ふものを現實に強化しなければならぬのであります。それから第二には、何と云つても日本人が大陸に發展をするのでありますからして、日本の大陸發展の爲に將來必要とする所の根柢は何としても確立をして置かなければならぬのであります。第三には現在日本人が兎に角戦亂の最中にあつても何でも、大和民族が支那に行つて此の事變の起ると同時に仕事をして居る。彼等の仕事と云ふものを非常に動搖をさしてはいけない。變へるべきものは徐々に之を變へて行く。漢民族の云ふことの中にも採らなくてはならぬことは多々あります。併しながらそれは急激なることは出來ないのであります。何となれば先程申上げましたやうに、東亞の防衛は大和民族國家が中心として爲すのであります。大和民族の結束力が一切のものを決定する要素であります。如何なる事情が出來ても、其の行ふことが大和民族の結束に役に立たない、大和民族の結束を破るものであるならば斷じて是はいけない。かるが故に如何に漢民族が訴へても之に急激なる變化を與へると云ふことは出來ないのであります。それから第四番目には、要するに意圖する所は漢民族を出來る限り此の日本の事變處理に協力をせしめる、即ち新秩序に協力せしめる。漢民族の協力態勢を強めなくてははいけない。漢民族の協力態勢を強めると云ふことは何であるか。是れ日本にまつらひ、一緒に手を携へて行くのだと云ふことを考へて出て來た人々の政治力を伸ばしたい。政治力を強化をしたい。同時に此の政治力の強化と關聯を有する所の重慶政府の弱体化、屈伏

更生新支那政權の現在及び將來

と云ふことに役立たせなくては行かない。斯う云ふやうな性格を有つたものに伸展して行くのであります。

然らば其の日本の東亞の防衛力を如實に強めると云ふものは何であるかと云ふと、それは地域的に云ふならば、北にあつては蒙疆、北支であります。南にあつては海南島及び之に關聯する海洋作戦の要地であると思ふのであります。即ち前途に横はる所の障礙は何であるか。始めに申上げましたやうに、日本の現在の姿は明治御維新の時の姿が彷彿として居る。即ち北、ソヴィエトと云ふものが虎視眈々として居る。ソヴィエトの意圖する所のものとアングロサクソン、英米が意圖する所のものは違つて居るかも知れぬが、日本に對する壓力の點に於ては同様であります。で日本が自然に漢民族を日本に歸一さして日本にまつらはして、日本と手を携へて東洋の平和の確立の一分擔者となると云ふことは、漢民族の性格から見て、漢民族の本質から見て、日本は何時でも之等の外壓に對して戦ひ得る、經濟的にも或ひは武力の上に於ても、如何なる形に於ても外交論戰をやるならば外交論戰をやつて、大和民族と云ふものは頼もしいと云ふことが漢民族の目に映らぬ限りは斷じて是は威服をしない。唯日本が毅然として此の東亞に對する外敵を反撥し得る信念と、之に基づく實力とを保有する時に於てのみ、是は付いて來るのであります。それを本當に考へて居る人が本當に日本に付いて來るのであります。さう云ふ風であるから、地域的に只今申したやうなことになるのであります。

次に物資の點について云ふならば何であるかと云ふと、是は日本の不足資源の獲得であります。日本の國力を今後國際政局の變轉に處して、之に堪えるが如く保有する。消耗し盡さない。人も然り、技術の力も然り、勞働力も然り、或ひは物其のものも然りであります。要するに綜合國力をなほ伸び切らない状態に於て保有しつゝ、而も其の

使つた所のものを極めて短期間に補充をして行く。即ち皇軍の威徳地帯に於ける所の物資を凡ゆる觀點から活用する。さうして其の活用が日本の國力を増大すると同時に、漢民族の社會的利福にも役立つやうにして行かなければならないのであります。さう云ふ根本的な要素に立つて行く。

然らばそれを達成する爲には如何なる政權が望ましいか、斯う云ふことであります。それは即ち漢民族が自主獨立し、漢民族の性格、漢民族の政治力を強くすると云ふ爲には、現實に生きて居る政治力を捉へなければなりません。今日支那の青年に向つて如何に巧妙に教を説いても受付けません。日本の方々は、何だ、三民主義を許してと斯う仰しやられるが、漢民族には日本精神とか皇道精神を受け容れるだけの素地が今日は皆無である。素地のないものを如何に説いて見た所で物にならない。處が今日の漢民族特に其の壯青年と云ふものは矢張り孫文の革命思想を受けて來て居る。北に於ては辯髪をして頭髪を長くして居る。さうしてやつて居る所のもの丸で社會から游離して居る。そんなものは漢民族の政治力など強く把握することは出來ない。矢張り今日の事態を發展させて行くは我が皇道精神に漢民族が融合し來ることを目標としなければならぬ。併しながら今日、即ち今の現實の事態に於てどうするか。今の國際政局に於て日本の國力を或る限度に保有しつゝ、先程申上げましたが漢民族が威服するに足る國力を持つと云ふことを意圖して、其の線を破らない事態に於て漢民族を率いて行くと云ふことになつて來れば、現實的なものを把握して行かなければならない。茲に新しい政權が汪兆銘を中心として生れて來て居ます。斯う云ふ根本の見方があるのであります。

先づ以て私は思想戦から云ふならば、漢民族中の重慶の政府の力は何處にあるかと云ふと、物質的にはアングロサク

クソンの援助を受けて居る。又ソヴィエトの方から思想と同時に物を受けて居る。此の抵抗の本體は何處にあるかと云ふことを分析をして行くところミントンにあるのであります。詰りさう云ふ抗戦力であります。

然らば今日の戦法として何があるか。私が反共に徹底せよと言ふのは是であります。先づ以て共産主義と他の思想とを分解してしまふ。支那大陸に於て反共運動を活潑に展開して、漢民族全部を率いて反共を展開する。茲に思想の統一があるのであります。然る後他の問題に觸れるが宜しい。又嘗て北伐をやつた時に、私は蔣介石の所に居つて、此の反共に徹底せよ、揚子江に出たならば反共を先づやれ、茲に面子が立つといふことを言つたことがあります。漢民族と云ふものは初めに逃げ道を與へてやるならば、政治の上に於ても戦さの上に於ても能くやる、結論を與へて置いてさうして戦ふ、逃げた所に精兵を置いて殲滅してしまふが宜い。さうすれば専念仕事に向ふ。逃げ途がない所では獸物でも噛み付いて来る。今日反共に徹底して行くならば、漢民族の大半と云ふものは私は把握し得るのであると思ふ。而して三民主義の悪い所は直ちに之を直して行く、反共も出来ない中から三民主義は何處が悪い、此處が悪いと云ふことは得策ではない。夫れは敵に勝たずして分け前を争つて居るやうなもので、それは自らの力の弱体化であります。斯う云ふことは自ら陣頭に立つて、さう云ふ仕事をして見ると直ぐ分ります。處がさうしないで、家の中で書類で以て議論して居ると、間々自らの力を弱化するやうな論法に進んでしまふのであります。そこでさう云ふやうな意味から國民黨の嘗ては領袖であつた處の汪兆銘を中心とする政府の成立を助けたのであります。政治的な條件を容れて上げて、さうして政府を作る、斯う云ふことに進んで来たのであります。

一體此の支那の發展を見ますと、殊に孫文なき後の支那の動きを見ると、茲に蔣介石を中心とする處の軍事獨裁的な政治的歩行と、之に鬭争して全民政治を行ふと云ふ思想と、この二つの流れがあるのであります。其の全民政治を主張して居るのが汪兆銘であります。是は昭和五年には嘗て汪兆銘は蔣介石から逃れて北に閻錫山、馮玉祥、是等の人達の上に立つて一つの政府を立てて、蔣介石の軍事獨裁と排目的傾向に戦ふと云ふ形を取つたのであります。處が其の當時、さう云ふ方向を取らずと云ふことは、日本人に東亞の問題は日本が中心であると云ふ非常な固き信念があり、是が内閣諸公を始めとして、總ての人がさう云ふ強い信念を持つて居るならば幾多のチャンスが茲にありました。是は其の時に北支那は獨立をして、滿洲は日本の思ふ通りにやつて貰つて宜しいから、北京の政府には手を出さぬやうにして貰ひたいと云ふことを申して居りました。又其の前に蔣介石はポロヂンを追うて、さうして支那の革命を遂行した。彼は昭和二年の十一月に東京に逃げて來ました。それは四月に南京に政府を作つて、日本に援助を請ふたが、日本がこれを斷行しない爲に非常な苦境に立ち、南京に止まり得なかつたからであります。元來北伐勢力と云ふものは廣東でやる時にはモスコの力を借りて軍隊を建設したのであります。尤も其の前に孫文は日本に來て、革命をやるから助けて呉れと云つたが、日本は斷つたのであります。そこでモスコから援助を受けて北伐軍を編成し、さうして北伐をやつたのであります。其の北伐の時に何と云つたかと云ふと、

「西に英の帝國主義あり、東に日本の帝國主義あり。此の二つの帝國主義を撲滅しなければ、中華民國の獨立成り難し。」

と云ふ宣言をして北伐を實行したのであります。處がそれが揚子江迄來ると、半分揚子江を把握出來れば支那の事業の半分は出來たと云ふやうなことから心境一轉して、さうして國民黨と共産黨と云ふものは内輪割れして分解したの

であります。そこでクーデターをやつて共産黨を一掃しました。處が是は誰も助ける人はない。助ける人がなければ成立たない。それで十月に日本に逃げて来て、時の總理田中將軍に會はれたのであります。さうして「滿洲は張作霖を相手にしてどう云ふ風に料理されても宜い。併し支那本土だけは自分にやらしてくれ」と言つたのであります。併し又チャンスを失つてしまつたのであります。

まだ外にもありますが、問題は何かと云ふことになつて来ると、要するに東亞の問題は日本に依つて、日本の作用に依つて、日本自らの力によつて決するのであると云ふ本當の固い信念が民族にまだ出来て居らぬのであります。明治の御維新をされた御方は、皆其の信念を把握して居つたと思ふのであります。處が御互にどうも非常に先輩がいゝ家を造つて呉れたものだから、其の家の中で安價な生活をして居る。茲に自らの魂を本當に活かさうといふ努力が缺除したのであらうと思ひます。だからどうしても此の事變を本當に日本の十萬の精靈を失つたと云ふ事態に應ずるやうに持つて行くには、今後非常に長い時間を要するが、根本は誰がやつて居るのでもない。日本の國體の有難さを奉じて、さうして此の國體の有難さを切思する民族の御奉公心、報恩感謝の思想に立脚して、我々御互の行を毎日強く行する處に存すると念ずる事にあるのであります。如何に辯舌を振つて支那人に呼び掛けて見た所が、物の強弱と云ふものを案ずるには極めて敏である彼等である、日本人にちよつとも自信がなくなつたと思へば直ぐそれが漢民族に反影する。さう云ふ習性を持つ民族であります。

それは單に支那人に反影するのみではない。アメリカにも反影し、到る所に反影する。で今後支那の政權は何と云つても日本の皇軍の威徳地帯に於て孤々の聲を擧げるのであります。此のものが發達するかしないかと云ふことは支那人の力でも何でもない。矢張り大和民族の聰明であり、力であります。之を右に活かすも、左に活かすも、日本人の力であります。唯漢民族の習俗、漢民族の性格に應じて其のやり方は種々あるだらうかと思ふのであります。何も漢民族の前で、「御前はただから付いて来い」と云ふことを云ふ必要はないのであります。併しながら御互の腹の底の思想の根柢には國體から與へられる絶対信念が無くてはならぬものであると私は信ずるのであります。萬物各々眞性ありでありまして、漢民族には漢民族の性があります。

最初に申上げました通り此の政權がどうなつて居る、斯うなつて居ると云ふやうなことは書類なり何なりで御覽になれば御解りなされることであつて、それよりも御互ひはさう云ふことを見ることに依つての自らの魂を活かすと云ふ所に、御互ひの氣分の方向を向けたいと云ふ意味から非常にあちこち致しましたが、以上述べさして戴きました次第であります。若しも將來御分りにならぬことがあると云ふことであれば、何時でも暇を見て御話を致すことに致します。甚だ雑駁な話を致しましたが、時間もないので之で終りに致します。